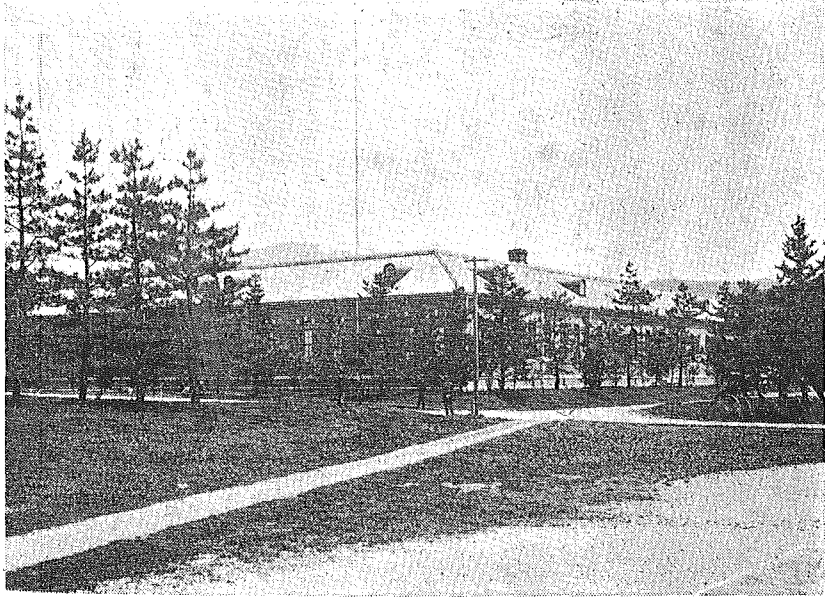


洛友会々報

京都市左京區吉田
京都大学工学部
電気科教室内
洛友会



今は姿変えた電気教室

ロの字型の教室。中庭の中央に雲を衝く無線のアンテナ柱。大学の建物の中で美しい触角を持ったのは電気教室だけであつた。この写眞は明治四十五年に写されたもの。右手前はテニスコート。アンテナの左に屋根の上へ少し頭を見せているのが比叡山。珍しいのは十字路の右上に人力車が客待ちしている。人力車夫に「旦那」と言われて、げげんな顔をしながら入学時代を思い出出す会員は、この写眞が懐しいであろう。(会報第五号の写眞と見くらべて下さい)

エチケツトから連想して

大一二 中嶋省三郎

「今時の若い者」を戦後派と言ふ、「アブレ」はどうも仕様がないうと吾々年配の人或はその前後の年配の人から聞くと。ところが振り返つて私共の若かりし頃を考えて見るとやはり「この頃の若い者は」と口癖のように言われたものもある。その当時若からざりし人達もその若かりしときには「今頃の……」とやられたに違いない。今日の戦後派の諸君が年配者になつた場合にはこの言葉は無くなるだろうか。おそらく同じことが繰り返されて、結局「今頃の……」なる熟語(?)は日本人の存続する限り永久に存在するのではあるまいか。恰も年代という車を廻す南京鼠の如く車はクル／＼廻つていくが、鼠はいつまでも同じ所にいる。

日本人は近い過去において無条件降伏をするという悲惨極まる戦争をした。これは日本人の在り方に間違つた何物かあつたに違いない。そして、その過誤が敗戦という大試練によつて悔い改められた「筈」である。また事実、日本人の各々が「その判断力の範囲内で」身にしみて悔悟させられたことであつた。ところが最近の世相をみると、小生には多分に懐疑を禁じ得ないものがある。あの無謀な戦争を敢てした過誤の根本をなす思想は依然として日本人の内に健在なのではなからうか、という疑念である。口に平和を唱えながら手に暴力を揮うが如き、また、自己一身の又はその一族の榮達のためには手段を選ばない者が一方において、口に安民救国を唱うるが如き、いかにこの種の輩の多いことか。更には事務系の優先、学問、産業技術の軽視等々、政府の施策のみに限らない、到る所で目につくことである。南京鼠同様、日本人は第二次大戦という大奮闘を敢てしたが依然昔と同じ所に手足を活動させている。智慧の足りない話である。

ところが、この疑惑について本年八月の洛友会々報の巻頭にある「品位を持ちたい」を拜見して大きなヒントを得た。即ち、「エチケツト」がなくてはならぬ、エチケツトとは一言にしていへば他人に不快の念を与えぬことである。「他人」を一言より、マルツキリ持ち合せがない、と言つた方が眞実に近いかも知れないが、これは定評のあるところである。然し又一面において日本人は礼儀作法に極めて厚い民族であるとも言われている。これも確かである。つまり日本人の礼儀は自分と何等かの関係にある相手に対するものであつて、赤の他人には通用しない行為である。いつ終るとも判らないほど、幾度も腰をかざめては挨拶を交わしていた御婦人が相手と別れて、いざ乗り物に乗る段に入口に押し合ひへん合ひ暴力を揮つて入口に殺到する。これに反してエチケツトという、何とはなしに、その感じが特に相手というほどのものがなくそれは、単に人間同志の間のことばかりではないような気がする。人が居ようが居まいが、身嗜みをくずさないといつた気持ちがそこにある。日本人は子供を非常に可愛がる。しかしそれは自分の子か、知つてゐる子供に対してのことであつて、見知らぬ者は路傍の石と同じである。吹米では鳥獸はもとより草木までも大切に、果物が路傍に実つ

ていてもこれを取ることがないといふ。つまり、日本人の礼儀にしろ愛情にしろ、その対象となる者は或る範囲に限定されているのが常である。自分の仲間同志の間では平和を念願するが、仲間以外の者には暴力を揮う。一族郎黨の榮達のためには他人を顧みない、といつた在り方も、然りに起因しているのではないかと。然り而して、この思想が大東亞戦争を起した根本の大きな因子をなしていると思ふ。こゝにおいて、曩の「品位を持ちたい」の中に述べられたエチケツトなるものが極めて意義深いと思ふ。赤の「他人」に対して「不快の念を与えぬ」気持ちが大切である。更に私はこの「他人」を一層普遍化して「他の一切の物」ということにしたい。

年配者が「近頃の若い者」と言うその心理状態には多分に、自分の若かつたときを忘れておき、且つ、自己反省の足りないことが推察される。敗戦に対する悔悟の不徹底なのは過去を反省する觀念の不充分なるに依るのではないか。吾々はモットモツト深く反省する処がなければならぬと思ふ。即ち、第二次大戦の過誤を反省して、戦前の「身を立てるを揚げ」主義―自分さえ出世すれば他人はどうでもかまわぬ主義に通じる―の処世方針を考え直し、特定の対象のないエチケツト、更には絶対愛―特定の対象のない、敵をも愛し得る普遍愛―を体得する必要がある。然らずんば、再び過去の過ちを繰り返すことがないとは言い得ないと思ふ。

私は「品位を持ちたい」の御意見の出たクラス会の問題については全く何も知らない者です。たゞこの御意見の文面そのものが甚だ意義深いものと感じました。拙文を認めたばかりのことであり、愚見を述べた材料にした失礼に対してそのクラス会の方々の御諒恕を乞ふ次第です。(一九・八・一五)

(日本輕器材株式会社)

教室だより

◇電気事業主任技術者無試験 詮衡について

新制大学になって今までの主任技術者の無試験詮衡は無くなりましたが、旧制卒業生のみに対し三十年三月からは基準が変更され非常にむづかしくなると云う通知がありましたので、まだ主任技術者資格を持つておられない方は、多少科目数に不足があつても、この際出願されるようにして頂きたい。詳細手續等は教室事務室へ連絡されたい。

阿部先生 記念会目録見

阿部先生 記念会目録見

阿部清先生には明年六月一日を以て停年御退官されることになりました。顧みまするに先生には母校に職を奉ぜられること廿五年の久しきに亘り、工学部並に化学研究所の教授として電気工学の研鑽と後学の育成に専念せられ、学界工業界に貢献せられた御功績は誠に偉大なものがあられます。

この機会に先生の知友門下生等の有志が相諮りまして、先生の多年の御功績を讃え永く記念いたしたいと寄り寄り協議中でその概略は次のようであります。

一、記念事業

- イ、昭和三十年六月上旬、記念講演会並に祝賀会を催し、記念品を先生に贈呈する。
- ロ、肖像画二面を作製し、一面を先生に贈呈、他の一面は教室に寄贈する。
- ハ、電気評論記念号を刊行する。
- ニ、その他

- 二、献金要領
- イ、献金額一口(金百円)以上

本部より

只、拂込期限 昭和三十年三月末
ハ、拂込先 教室内阿部先生記念会。追て洛友会本部役員の方は発起人と致しますので予め御承認願います。

◇昨年年名簿の発行につきましては、その整理作成に極力の努力を致しましたが、期日の関係もあり、居所不明者が多くて齒抜けの個所あり、御期待に副い得なかつたことを遺憾に存しております。その後調査の結果、別表のように卒業生総数二、一八〇名(二、一〇六)内居所不明者一、七三一名(一、五四二)居所不明者九〇名(二四〇)物故者三五九名(三二〇)(但し括弧内は昨年年名簿発行当時の数)となり、完成に今一步という処まで漕ぎつきました。そこで本年はとりあえず、昭和二十九年年度改定版として、名簿だけを十一月に発行致すこととし、現在印刷の校正中でありまして、転職転任の方は勿論、町名、電話番号の変更等も前号会報に同封しておきました葉書により折返し御通報下さい。

北海道より



昭和一九クラス会



中部支部だより



学族一味

この族は家族、民族等の族で悪い意味では闊ボスと同意語である。僕はこの族に感謝するものである。僕は卒業後其商事会社に勤め先輩N氏の引立を受け、セルルスエンジニアとして全国の電気会社の機械入札に直接、間接に参加し、その会社に同族の人が居らるゝ所では涙ぐましい援助を受けました。入札は一種の戦争で虚々実々その苦楽はセルルスに當る本人のみが味方スリルである。幸い僕は京大学族の恩恵を満喫した幸福を感謝する。我が洛友会も私交上の親睦は素より、せち辛い世の中では学問の上、仕事の上で不正でない限り便宜を計り合つて下さい。排他的に取られては困るが、要領よくこの学閥の族を發展させたいものだ。

一九〇八年卒
・YAMATA
・KOITTI

北海道より

加藤先生が北海道にお出でになつた際に、道内の洛友会々員が八月三日に札幌に集り、先生を囲んで懇親会をもちました。
懐旧談に花を咲かせ、遠く離れて居る教室の感況を親しく承つたりして、和やかな雰囲気のおふれる会合でした。
当日は仕事の都合で出席出来ない方もあり残念でしたが、出席者九名(大塚(大6)、小田部(大7)、俣野(大14)、片山(大15)、橋本(昭2)、村松(昭2)、副島(昭13)、池内(昭21)、芝山(昭28))
写眞の通り、老若共に元気にやつています。
現在、道内の会員は約十七名ですが、加藤先生の熱心なおすゝめもありますので、早々に北海道支部結成を期しております。
尚、先生は同日「原子時計」の講

演や市内見物を済ませた後、定山溪泊、翌朝、支笏湖を経て、坂入氏(28)の案内で富士製鉄室蘭工場を見学され、登別温泉泊、洞爺湖を巡り函館湯の川泊、六日には女子トランプを視察され、その後、函館山頂上にある国鉄青函極超短波受信装置及び折から開催中の北洋博を見ていた。連船船へと見送つた次第です。この間つと副島氏(16)の案内。

今回の御旅行では限られた時間内を寸刻を惜んで引ッ張られました。先生の御老体に無理がか、らなかつたかと、一同心配していた次第です。どうか、これに懲りられずに教室の諸先生方の御來道をお待ちしております。

(芝山記)

昭一九クラス会

十年一昔、卒業後の三十面は写真

第二回洛友会總會通知

第一回總會において第二回は東京にて開催のことに決定されましたので、協議いたしました結果、左記要領により開催いたしますから、諸種の会合もその前後に東京にてお催しに相成るようお手配下さいまして、出来るだけ多数の方の御出席をお待ちいたします。

記

第一日(皇居、御苑拜観、趣味大会)

- 一、月日 十一月二十日(土)
- 二、集合場所 東京駅降車口待合室(丸の内側)
- 三、集合時間 午前九時三十分
- 四、順序

【第一部】
降車口待合室より皇居、内櫻田間徒歩(九・三〇一〇・〇〇)

中部支部だより

鳥養会長昨日御來名の節、中部支部總會を来る十月二十三日(土)開催、会長並に先生方の御來名の承諾を得ましたので、會員諸兄の奮つての御出席をお願い致します。

中部支部月例会は毎月第三土曜日

東京支部 七月幹事会

秋の總會、名簿発行の件等を審議するために七月三十一日(土)午後三時から東京支部事務所(七月幹事会を開きました)が、土曜日のため出席率が悪く乙葉副支部長、巽、石川、久野、吉岡、筑木の各幹事と小

に日立クラブ(名古屋市中村区牧野小学校南門前(電54六二七七))で午後一時より午後五時まで開きますので、支部以外の方々の御参加を歓迎いたします。

中部支部も名工大長清水氏という名支部長を得て活動が次第に軌道に乗つて来たという感じがします。最近の支部情勢については追って詳細を御報告致しますと存じます。

(中部支部庶務幹事川端太郎)

【第二部】

閉基大会(幹事園 山 裕 22) 麻雀大会(幹事 老田他四郎 20) を催しますから参加のお申込み下さい。会場、集合場所及び時間等は追って通知致します。参加費は二〇〇円位頂く予定です。賞品は沢山準備いたします。

第二日(總會と懇親会)

- 一月日 十一月二十一日(日)
 - 二、会場 目黒 雅叙園
 - 三、集合時間 午後四時
 - 四、順序
- 總會(午後四時より午後五時) 懇親会(午後六時より午後八時)の予定

【第三部】
十一月二十二日(月)
幹事 松本久長(大9)
会場 集合時間等は追って幹事から御通知致します。

とて七人でした。筑木幹事から本日午後五時に加藤先生が御上京される旨報告があり、幹事会に御出席願うことになり、石川幹事の提案で会場を築地の「むらき」に移しました。

秋の總會につきましては別掲のよるな計画を満場一致で決定し、名簿再発行については今までに可成りの変更があるので本件も全員異議なく更にご利用価値を高めるために関係官庁、民間会社の職制、職員名を掲載する案が出され、是非実施したいと思ひます。次に趣味の会については各グループ毎に幹事をきめ会員相互の親睦を図ることにしましたが、將來は各支部対抗の大会を開催する予定にしています。

一応議題として以上の三件を審議して頂き、それから懇談に入りましたが、加藤先生からも本部、支部或

洛友会々員数調

| 卒業年度 | 總数 | 居所不明 | 居所不明 | 物故 |
|------|----|------|------|----|
| 明三 | 三 | 一 | 一 | 一 |
| 三四 | 五 | 一 | 一 | 一 |
| 三五 | 六 | 一 | 一 | 一 |
| 三六 | 七 | 一 | 一 | 一 |
| 三七 | 八 | 一 | 一 | 一 |
| 三八 | 九 | 一 | 一 | 一 |
| 三九 | 一〇 | 一 | 一 | 一 |
| 四〇 | 一一 | 一 | 一 | 一 |
| 四一 | 一二 | 一 | 一 | 一 |
| 四二 | 一三 | 一 | 一 | 一 |
| 四三 | 一四 | 一 | 一 | 一 |
| 四四 | 一五 | 一 | 一 | 一 |
| 四五 | 一六 | 一 | 一 | 一 |
| 四六 | 一七 | 一 | 一 | 一 |
| 四七 | 一八 | 一 | 一 | 一 |
| 四八 | 一九 | 一 | 一 | 一 |
| 四九 | 二〇 | 一 | 一 | 一 |
| 五〇 | 二一 | 一 | 一 | 一 |
| 五一 | 二二 | 一 | 一 | 一 |
| 五二 | 二三 | 一 | 一 | 一 |
| 五三 | 二四 | 一 | 一 | 一 |
| 五四 | 二五 | 一 | 一 | 一 |
| 五五 | 二六 | 一 | 一 | 一 |
| 五六 | 二七 | 一 | 一 | 一 |
| 五七 | 二八 | 一 | 一 | 一 |
| 五八 | 二九 | 一 | 一 | 一 |
| 五九 | 三〇 | 一 | 一 | 一 |
| 六〇 | 三一 | 一 | 一 | 一 |
| 六一 | 三二 | 一 | 一 | 一 |
| 六二 | 三三 | 一 | 一 | 一 |
| 六三 | 三四 | 一 | 一 | 一 |
| 六四 | 三五 | 一 | 一 | 一 |
| 六五 | 三六 | 一 | 一 | 一 |
| 六六 | 三七 | 一 | 一 | 一 |
| 六七 | 三八 | 一 | 一 | 一 |
| 六八 | 三九 | 一 | 一 | 一 |
| 六九 | 四〇 | 一 | 一 | 一 |
| 七〇 | 四一 | 一 | 一 | 一 |
| 七一 | 四二 | 一 | 一 | 一 |
| 七二 | 四三 | 一 | 一 | 一 |
| 七三 | 四四 | 一 | 一 | 一 |
| 七四 | 四五 | 一 | 一 | 一 |
| 七五 | 四六 | 一 | 一 | 一 |
| 七六 | 四七 | 一 | 一 | 一 |
| 七七 | 四八 | 一 | 一 | 一 |
| 七八 | 四九 | 一 | 一 | 一 |
| 七九 | 五〇 | 一 | 一 | 一 |
| 八〇 | 五一 | 一 | 一 | 一 |
| 八一 | 五二 | 一 | 一 | 一 |
| 八二 | 五三 | 一 | 一 | 一 |
| 八三 | 五四 | 一 | 一 | 一 |
| 八四 | 五五 | 一 | 一 | 一 |
| 八五 | 五六 | 一 | 一 | 一 |
| 八六 | 五七 | 一 | 一 | 一 |
| 八七 | 五八 | 一 | 一 | 一 |
| 八八 | 五九 | 一 | 一 | 一 |
| 八九 | 六〇 | 一 | 一 | 一 |
| 九〇 | 六一 | 一 | 一 | 一 |
| 九一 | 六二 | 一 | 一 | 一 |
| 九二 | 六三 | 一 | 一 | 一 |
| 九三 | 六四 | 一 | 一 | 一 |
| 九四 | 六五 | 一 | 一 | 一 |
| 九五 | 六六 | 一 | 一 | 一 |
| 九六 | 六七 | 一 | 一 | 一 |
| 九七 | 六八 | 一 | 一 | 一 |
| 九八 | 六九 | 一 | 一 | 一 |
| 九九 | 七〇 | 一 | 一 | 一 |
| 一〇〇 | 七一 | 一 | 一 | 一 |

明治のボンボン 集つとくれやす

は教室の近況についてお話があり、十時に散会致しました。(老田)

洛友会第二回總會が東京で開催されます機会に、明治時代(大正元年を含む)だけの会合を催したいと思ひます。是非、上京して下さい。お互いに誘ひ合せて出席して下さい。どんな会合かは秘中の秘。

世話人 佐藤 穂徳

